

平成 23 年度事業計画

事業運営方針

平成 22 年 11 月 11 日に一般財団法人としてスタートし、3 月 31 日までの約 5 ヶ月間のみなし事業年度を経て、本年度は「公益目的支出計画」に記載した実施事業を着実に実施する初年度と位置づけている。すなわち、新たな 3 つの公益目的事業と従来から取り組んできた 2 つの継続事業を展開する。このうち試験研究事業は 2 つで残りは社会貢献事業である。

社会貢献事業の中心に据える事業活動は、当研究所が事務局を務める「世界かき学会」の活動であり、ビジョン・使命に示されている「かきに関心をもつ世界の人々を人類の利益のために結集すること」、及び「世界のあらゆる場所においてかきの研究、生産及び利用と何らかの関係をもつすべての人々に対して善意、友情及び協力の媒介者になること」の実現を目指すものである。

世界かき学会の事業は対象を広く世界の国々とするが、国内向けにはカキの産地を対象とした「地域密着型かきフォーラム事業」にも力を注ぎ、今後の事業の大きな柱に育ててゆく。

本年度は第 4 回国際かきシンポジウム開催の年にあたるとともに国内では第 2 回かきフォーラムを開催する計画であり、重要な事業年度となる。

実施事業

1. 世界かき学会(WOS)の運営

(1) 第 4 回国際かきシンポジウムの開催及び現地への支援

IOS4は平成23年9月15日～18日にタスマニアのホバート市において開催する。

今回のテーマは「イノベーションによるカキ研究・産業の将来展望」とし、生産・供給・販売促進、環境変化への対応等におけるイノベーションについて様々な知見の披露と活発な討議が行われることを期待している。WOSの事務局を務める当研究所は、基調講演者の人選や過去3回のシンポジウム開催を通じて蓄積した運営ノウハウをもとに現地開催委員会を支援する。

国際かきシンポジウムは15日～16日の2日間の開催とし、17日はタスマニアかき産業会議(shellfish futures 2011)が開催され、18日はポストシンポジウムツアーが計画されている。

タスマニアかき産業会議は、カキ産業の現場に直接関係する人々が集いタスマニアのカキ産業の国際競争力強化を図るための戦略等について意見交換する場となっており、日本はじめ世界中のカキ産業に携る人々にとってもこの会議に参加することは極めて有意義である。事務局としては、多くの方々がこの会議に出席して、世界最先端に行くタスマニアのカキ産業に触れていただくよう推進する。

(2) プロシーディングの発行

IOS4 のプロシーディングは、シンポジウム講演者が講演で使用した原稿を WOS 事務局に集め、開催国委員会が冊子として発行することにより、講演者の負担軽減と迅速な情報発信を図る。

(3) 第 5 回国際かきシンポジウム (IOS5) の開催国の調整

IOS4 開催期間中に国際かきシンポジウム運営委員会を開催し、平成 25 年度に開催する IOS5 の開催国を決定する。現在、開催国として名乗り出ているベトナム、アメリカ、フランス、中国の 4 ヶ国のうち、ベトナムは政府機関が積極的に誘致活動を行っており有力候補と考えられる。

2 . かきフォーラム・イン・気仙沼 (仮称)の開催

平成17年に成立した「食育基本法」に基づき、全国の自治体がそれぞれ「食育推進計画」を策定し取り組んでいる。当財団はこの取組みに協力できるものとして、国内のかき生産地で開催し、地域市民へのかき食文化の普及啓蒙、かき生産者・流通業者と消費者の交流、さらに地産地消の促進などを目的とした「地域密着型のかきフォーラム」である。

第 1 回は平成23年1月30日兵庫県赤穂市において開催し、予想を超える428名の地元市民が参加し、好評を博した。

本年度は当研究所の設立 50 周年にあたることから、設立の地である気仙沼市で開催を計画している。

内容は、第 1 回と同様にカキの専門家及び生産者が講演し、地域住民・かき生産者・流通業者等を参加対象者とする。今後現地関係者と連携を取りながら、開催日時や場所、テーマ設定、講演者の選定、告知方法等々の細部について検討を進める。

3 . かきに関する研究を行う大学等の若手研究者に対する研究助成

本事業は、公益目的支出計画に掲げた事業のひとつで昨年度から着手した事業で

ある。かきに関する研究を行う大学や研究機関等の若手研究者個人又はチームに対して研究助成を行うもので、水産学部を持つ大学への案内やホームページで公募を行い、応募の中から2件採択した。

募集の過程で研究範囲や助成対象者について要望が寄せられたことを踏まえ、今後研究助成審査委員会では本年度の公募条件を拡大する方向で検討する。

助成件数・助成金額は昨年度と同様にそれぞれ3件、30万円とし、今後のスケジュールは下記の通りとする。

公募要領の決定：8月、告知：9月初旬、公募締切：11月末

審査結果の発表：2月末、助成金交付：4月初旬

4. ノロウイルスフリーカきの生産法確立および養殖カキ品質向上のための研究

ノロウイルスによる急性胃腸炎の原因食品としてカキなどの二枚貝が取り上げられてからカキの消費量、価格は低迷傾向にあり、とりわけ生食用かきの生産は大きな打撃を受けていることから、「ノロウイルスフリーカキ」生産法の確立が強く望まれている。ノロウイルスに関する基礎研究に早くから取り組んできた当研究所では、「カキがノロウイルスを取り込む仕組み」を解明し、それを応用することで「カキにノロウイルスを取り込ませない方法」の確立を目指している。

宮城県のマガキは世界各地に輸出され、その地に定着し、重要な産業種としての地位を確立してきた。今日、産地間競争は激しさを増しており、特に「量から質へ」の転換をはかる動きは加速している。このような状況において、我が国のかき産業の優位性は失われつつあり、カキの品質向上は喫緊の課題である。

本事業は遺伝育種学的手法を取り入れて国際競争力を持つ優れたカキの開発を目指すものであり、当研究所が平成16年度より東北大学大学院農学研究科との共同研究として実施してきた事業を発展的に継続、応用展開するものである。

5. カキなど二枚貝の特性を生かした環境評価法に関する研究

海洋環境、特に沿岸環境の汚染は沿岸生物の個体数の減少や多様性の喪失をもたらし、ひいては水産資源にも大きな影響をおよぼす問題である。さらに沿岸環境の保全是水棲生物ばかりでなく、周辺で生活する人間にとっても重要である。沿岸環境の良否や変化を評価する指標としては、水質や底質などの物理化学的項目がこれまで主に用いられてきた。近年、環境評価に生物指標（バイオマーカー）を導入することは必須になってきており、生理生態特性を考えると二枚貝類が最適なバイオマーカーだと考えられる。本事業はマガキを用いた環境評価法の確立を目指し、評

価項目や評価基準を検討する。

本事業は東北大学大学院農学研究科との共同研究として行う。

その他事業

1. カキに関する研修の企画実施（受託事業）

本事業は、カキを原料とする商品を取り扱う企業の社員研修として実施するもので、当該企業の商品知識研修を補強し、社員のスキル強化を目的としている。

研修内容は、カキに関する知識を生物学及び食品の視点から深く掘り下げて学ぶほか、生産現場での種苗生産実習、海上の養殖施設見学など5日間コース（基本）とするが、内容・日程等について受講者側の要望に応じたカリキュラムを編成し対応する。